

洪 本健校箋

『歐陽修詩文集校箋』

東 英 壽

九州大學

二〇〇九年八月、洪本健校箋『歐陽修詩文集校箋』上・中・下（以下、本書と記述）が上海古籍出版社より中國古典文學叢書の一環として刊行された。本書は、北宋の歐陽修（一〇七―一〇七二）の全集『歐陽文忠公集』百五十三卷のうち、『居士集』五十卷、『居士外集』二十五卷部分に収録される千三百十餘篇の作品について、字句の校勘を行い、編年を検討し、箋注をつけて、集評を附したものである。

まず、本書の特色としては、校勘に際して天理大學附屬天理圖書館所藏の『歐陽文忠公集』を使用することがあげられる。『歐陽修詩文集校箋』前言で、洪本健氏は次のように記述する。

考慮到四部叢刊本與最早的周必大刻本屬於一個系統、且爲歷來讀者廣泛使用與認可、故本書以之爲底本、而以日本天理大學附屬天理圖書館所珍藏的南宋本歐集爲主要參校本、並適當參考其他版本、進行校勘。

本書では底本として四部叢刊本を用いたが、これは賢明な選擇である。なぜならば、四部叢刊本は周必大刻本の系統であり、これまで廣く使用され認められてきたからである。確かに、従前の研究においてもテキストとしては四部叢刊本を用いたものが多かった。ただ、四部叢刊本は明代の影印本^①で、周必大本が刊行された南宋より時代が隔たっており、テキストの信頼性という面で些か不安が残る。そのため洪本健氏は、校勘にあたって天理圖書館所藏の南宋本『歐陽文忠公集』を使用している。これはこれまでの歐陽修の全集にはない大きな特色であると言えよう。

天理圖書館所藏『歐陽文忠公集』には金澤文庫の印があり、もと金澤文庫の所藏で、その後、古義堂伊藤家の手を

經て天理圖書館に收藏された。『歐陽文忠公集』百五十三卷附錄五卷のうち、卷三十五から卷四十第一葉、卷七十三第十八葉から卷八十五、卷九十三第一葉から第五葉、卷九十四第二十六葉から第二十九葉、卷百四十第一葉から第十六葉、及び附錄卷五第三十七葉の合計二十三卷部分には後人の補寫があるが、南宋刊本がほぼ原形を留めて傳わっているので、我が國では昭和二十七年（一九五二）に國寶に指定されている。

ところで、歐陽修の全集は、南宋の周必大（一二二六～一二〇四）が「歐陽文忠公集後序」で述べるように、紹熙二年（一一九二）から慶元二年（一一九六）の六年間で編纂された。そのため、文化廳監修『國寶』（毎日出版社、一九八五年）では天理圖書館所藏『歐陽文忠公集』を周必大の原刻本と見なし慶元二年の出版とする。一方、『善本寫真集十九 宋版』（天理圖書館、一九六二年）においては、「刻工に勘案して慶元・嘉泰の交の刊刻か」と記載する。周必大の原刻本かどうかを明らかにせず、慶元年間（一一九五～一二〇〇）から嘉泰年間（一二〇一～一二〇四）にかけて

の頃に刊行されたと見なしている。このように、これまで天理本の刊行時期については些か曖昧な點があった。

周必大らの編纂した『歐陽文忠公集』は、開禧年間（一二〇五～一二〇七）頃に息子の周倫によって修訂されている。周倫は、歐陽家に傳わる「公家定本」を入手し、原刻本を修訂して刊行したのであった。歐陽家側の資料が加わったことにより、周倫らの修訂はより精度を増したものと思われる。この周倫の修訂本の系統に屬するのが天理本であり、従って本書が天理本を校勘に使用したことは、テキストとしての價值を一層高めたと言える。

たとえば、『居士外集』卷六「酬滑州公儀龍圖見寄」詩について、天理本では『居士外集』卷六にこの作品が收録されており、さらに卷末の校勘（校語）に再びこの詩が附されている。このことについて本書の校記では、次のように記載する。

天理本卷後又附此詩、石本「秋風」作「狂風」。詩後云…「至和元年仲冬七日記。」下注…「此方石本見存。」

天理本の卷末校勘に收録された作品は、本文の「十年間落任秋風」の「秋風」が「狂風」となる違いがあるけれども、他の文字は全く同じで、その最後に「至和元年仲冬七日記」という歐陽修の書き入れがあった。その後に「此方石本見存」という割注があることから、この作品は周必大らが全集を編纂するに当たって収集した諸本の一つ、石本に收録されており、そこには作成年が記されていたことがわかる。本書では、校記でこのことを指摘した上で、箋注に「原未繫年、置至和二年詩後、誤、當如天理本卷後附石本所云、爲至和元年（一〇五四）作」と記述し、天理本によって作成年を確定している。

他にもたとえば『居士集』卷十二の「送謝中舍二首」について、本書で底本とした四部叢刊本や他の諸本には卷末に校勘は無いが、天理本には卷末に校語がある。そのことについて本書の校記では次のように記載する。

天理本卷後校…掇英集作「送謝續知餘姚」。「送」一作

「寄」。案…詩末句「離觴莫惜更留連」、一作「寄」、恐非。十一卷有謝判官幽谷種花詩、又、答謝判官獨遊幽谷見寄、卽續也。

天理本に見られる卷末の校語や按語により、謝中舍は謝判官で、名は續であるということがわかる。さらに、『居士集』卷五十「青州求晴祭文」の「斯民之苦若此也」について、本書では校記で「『苦』字原缺、天理本卷後校…『之』字下有『苦』字。」據補」として天理本に基づき「苦」字を補っている。確かにこの箇所は、底本では本文が「斯民之苦若此也」で、その校語では「之字下有若字」と記載され、もし底本の校語に基づき本文を補うと「斯民之苦若此也」となってしまう、意味が通じないことになる。

『居士集』卷四十の「峴山亭記」について、底本である四部叢刊本では「元凱銘功於一石、一置茲山之上、一投漢水之淵」とあるが、天理本では「一石」が「二石」となっている。意味の上から考えると天理本の方が適切であり、本書では校記に「原作「一」、據天理本改」とする。このよ

うに、隨所に天理本を校勘に使用した成果を取り入れているのが本書の大きな特色である。

さて、本書の著者である洪本健氏は一九四五年福建生まれ。華東師範大學中文系修士課程を修了した後、華東師範大學で教鞭を執り、その間、華東師範大學出版社社長、文學與藝術學院院長等を歴任され、現在は中國古代散文學會副會長、宋代文學學會理事や歐陽修學術研究中心副主任等も務めておられる。歐陽修に關する論著は數多く、今日の中國における歐陽修研究の第一人者と言ってよい。特に洪本健氏の歐陽修に關連する著作としては『醉翁的世界——歐陽修評傳』（中洲古籍出版社、一九九〇年）、『宋文六大家活動編年』（華東師範大學出版社、一九九三年）、『歐陽修資料彙編』上・中・下（中華書局、一九九五年）をあげることができ、これらの著作はいずれも今回の『歐陽修詩文集校箋』編纂に大きな影響を与えている。

ところで、これまでの歐陽修研究の狀況を簡単に振り返り、これらの洪本健氏の著書が歐陽修研究でどのような位置を占めているのかを確認しておきたい。歐陽修研究において、

その出發點と考えられるものは、歐陽修の様々な方面の功績を、初めて全體的視點から考察した劉子健『歐陽修的政治與從政』（香港新亞研究所、一九六三年）だと言えよう。もちろん、劉氏以前にも歐陽修についての研究はなされており、たとえば田中謙二「歐陽修の詞について」（『東方學』第七號、一九五三年）、趙貞信「歐陽修對『經學』上的貢獻」（『文史哲』一九五八・三、一九五八年）等があるが、いずれも歐陽修の學術の側面を切り取って考察したものであり、歐陽修の様々な側面を總合的に研究したものとしては、やはり劉氏の書をその第一にあげねばならないであろう。劉氏の著書は、上編と下編に分けられ、上編では歐陽修の學術と思想、下編では歐陽修の政治家としての經歷と業績が論述されている。歐陽修の研究史において、劉氏によって初めて歐陽修の諸學問と經歷が總合的に考察されたと言つてよい。同書は、一九六七年に英文によるJames T. C. Liu, *Ou-yang Hsiu: An Eleventh-Century Neo-Confucianist* (Stanford: Stanford University Press) としつゝ一部改訂され刊行されている。劉氏によって開拓された、歐陽修の學術

と經歷を總合的に考察しようとする流れは、その後一九八〇年に蔡世明『歐陽修的生平與學術』（臺灣文史哲出版社）に受け繼がれる。蔡氏も上編と下編とに分け、上編のタイトルは「歐陽修的生平」、下編は「歐陽修的學術」として、歐陽修の學問と經歷とを結びつけて論述する。一九八三年出版の林子鈞『六一居士歐陽修』（莊嚴出版社）も全體を「歐陽修的生平」と「歐陽修作品選析」に分けて考察している。こうした歐陽修の經歷と學術を結びつけて研究するという系譜に屬するのが、洪本健氏が一九九〇年に刊行した『醉翁的世界——歐陽修評傳』である。該書は全體を十九章に分け、一章～十五章において歐陽修の經歷と政治活動を論述し、十六章～十九章において學術面を考察する。特に十六、十七章の散文を考察した章は、散文の句式、用語、構成等の特色を種々の觀點から分析したもので、印象批評の色彩が強かったそれまでの研究とは違い、客觀的分析に基づいた考察であり、大いに説得力を持つものであった。

一九九三年に出版された洪本健氏の『宋文六大家活動編年』は、唐宋八大家のうちの宋代の六人、すなわち歐陽修、

蘇洵、曾鞏、王安石、蘇軾、蘇轍の經歷と詩詞文賦の創作活動狀況を編年に並べたものである。歐陽修が生まれた一〇〇七年から蘇轍が亡くなった一一二二年までの百六年間を對象とする年譜である。もちろん、この六人のそれぞれの年譜は當時すでに幾種類が存在していた。該書の洪本健氏の序によれば、たとえば姚范『南豐年譜』、楊希閔『曾文定公年譜』、王煥鑑『曾南豐先生年譜』、周明泰『曾子固年譜』、蔡上翔『王荊公年譜考略』、顧棟高『王荊國文公年譜』、王宗稷『東坡先生年譜』、傅藻『東坡紀年錄』、施宿『東坡先生年譜』、孫汝听『蘇穎濱年表』、曾棗莊『蘇轍年譜』等々があげられる。歐陽修の年譜について言えば、『宋文六大家活動編年』出版以前には、周必大らの全集編纂時に作成された『廬陵歐陽文忠公年譜』、清代の楊希閔『歐陽文忠公年譜』、同じく清代の華萼亭『增訂歐陽文忠公年譜』や一九八〇年出版の林逸『宋歐陽文忠公修年譜』（臺灣商務印書館）等があつたけれども、洪氏は歐陽修單獨の年譜作成を目指さなかった。そのことについて、洪本健氏は該書の序で次のように記述する。

從縱向來看，六家置身文學事業具有新老交替、前後傳承的特點、……就橫向而言，六家不僅在政治生涯和文學經歷方面互有關聯，而且他們跟衆多的文人學士交往，有着極其廣汎的社會關聯。我的腦海中關於編年性的想法漸漸形成了一個既上下相聯、又左右貫通的框架。

『宋文六大家活動編年』は宋六家の繋がりを縱方向と橫方向とから捉えようと構想されたものである。該書によって宋の六家間の縱（前後）・橫（左右）の關連が明らかとなり、それによつて六家それぞれと交流した文人達の繋がりが整理されて、北宋中後期の百有餘年間の文學創作や文人間の影響關係を一望に収めることができるようになった。洪本健氏の目指した「上下相聯、又左右貫通的框架」はまさに成功したと言えるであらう。

そして、一九九五年に洪本健氏は中華書局より『歐陽修資料彙編』上・中・下を刊行する。該書は、北宋中期から五四運動以前の約九百年間、七百餘種の書物に散見する歐陽修に關連する資料を網羅し、時代順に配列したものであ

る。今日、歐陽修研究において極めて利用價值の高い基礎的資料集だと言える。

『歐陽修資料彙編』に引用された文獻は、もちろん本書の集評部分に引用されることが多い。たとえば、『居士集』卷二「水谷夜行寄子美聖俞」詩の本書の集評には黃震『黃氏日鈔』卷六十一を引いて、

「微風動涼襟、曉氣清餘睡。」見平旦氣象、極工。此詩說蘇子美詩雄、梅聖俞詩清。

と記述する。『歐陽修資料彙編』の黃震部分を見ると、歐陽修の多くの作品に關する黃震の作品評が記載されており、その一つがここに本書の集評として取り上げられていることがわかる。『歐陽修資料彙編』の編纂作業を経た洪本健氏だからこそ、その集評は的を射たものであり、本書の前言では多くの集評の中から精選したことを「關於集評、總的原則是精選」と記している。たとえば『醉翁的世界——歐陽修評傳』第十八章「影響一代風氣的歐詩」において歐陽

修の律詩について、

歐陽修着力于情意靈活自如的抒發、即使是律詩、也不拘泥于嚴格的對仗。『韻語陽秋』認為「律詩中間對聯、兩句意甚遠、而中實潛貫者、最爲高作」

と記述するが、もちろんこの作品評は『歐陽修資料彙編』の葛立方の項目に『韻語陽秋』卷一の記事として引用され、さらに本書の『居士集』卷十三「送王平甫下第」詩の集評として引用されている。このように、本書の集評部分は、洪本健氏の先行の著書の成果と密接に関連していることが窺えるのである。

ところで、宋代、特に南宋に入ると、文人の詩文集に注釋が施されることが多くなり、たとえば王安石、蘇軾、黃庭堅、陳師道等の北宋の文人達には、注釋本が刊行された。しかし、歐陽修については宋代に注釋本は刊行されることがなく、最初の注釋本と言えるのは、一九五八年に黃公渚が詞に注釋をつけた『歐陽修詞選譯』（作家出版社）であり、

その後、王鐸『歐陽修詩文選注』（貴州人民出版社、一九七九年）が刊行された。本書の前言で洪本健氏は、施培毅『歐陽修詩選』（安徽人民出版社、一九八二年）、杜維沫・陳新『歐陽修文選』（人民文學出版社、一九八二年）、陳蒲清『歐陽修文選讀』（岳麓書社、一九八四年）、陳新・杜維沫『歐陽修選集』（上海古籍出版社、一九八六年）、陳必祥『歐陽修散文選集』（上海古籍出版社・三聯書店〔香港〕有限公司、一九九七年）、王秋生『歐陽修蘇軾潁州詩詞詳注輯評』（黃山書社、二〇〇四年）等の先行の注釋本をあげ「這些選本都給筆者提供了有益的參考」と記述する。實際に箋注を見てみると、様々な觀點から種々箋注が附されており、そうした作業を千三百十餘篇行つた洪本健氏の勞苦は稱贊に値する。箋注の中には前述した先行の注釋本の成果をうまく取り込んでいる箇所もあるが、ただどの注釋本から引用したのかということについては記載していない。全て洪氏の見解かのような誤解が生じるので、この點については改めて欲しいと思う。もちろん、先行の注釋本はいずれも歐陽修の一部分の作品に注釋を施しているに過ぎず、洪本健氏が

『居士集』、『居士外集』に収録されている全ての作品に箋注を施したという功績は大いに評價すべきである。

また、詩文の繫年の正確さも本書の特色の一つである。歐陽修の詩文の作成年については、南宋の周必大らが『歐陽文忠公集』を編纂した際に、目次の題下に書きつけている。ただ、周必大らの全集編纂は、歐陽修が亡くなってすでに百年以上経った後だったので、もはや彼らが制作年を確定できなかった作品もあり、また彼らが確定した制作年に誤りがある可能性も捨てきれなかった。しかし、多くの研究者は、今日に傳わる最も古いテキストである周必大らの『歐陽文忠公集』に書きつけられているという理由で、周必大らの確定した制作年を疑わずに、それに基づいて議論するのが普通であった。

しかし、本書においては、周必大らの確定した制作年の誤りをしばしば指摘し、さらには周必大らが特定できなかった制作年を確定させた作品も数多い。周必大らの制作年の誤りを指摘した例としては、たとえば『居士外集』巻九「原弊」が挙げられる。本書箋注では「題注「康定元

年」、誤、當爲景祐三年（一〇三六）作」と記述する。その理由としては「原弊」の文中に「國家自景德罷兵、三十三歲矣」とあり、景德元年（一〇〇四）の澶淵の盟から三十三年後は、景祐三年（一〇三六）であるということが指摘されている。傍證として、「原弊」の文中に「前三歲、連遭旱蝗而公私乏食」という記述があり、これは『續資治通鑑長編』巻百十二、明道二年（一〇三三）に日照りといふなどの害があつたという記事に符合すると言う。明道二年は景祐三年の三年前であり、周必大らが推定した制作年である康定元年（一〇四〇）の二、三年前には日照りやいなどの害はなかつたと洪氏は記述する。同じく『居士外集』巻四「來燕堂與趙叔平王禹玉王原叔韓子華聯句」について、本書箋注では「題下注「嘉祐三年」誤」として、作成年を「當爲嘉祐二年（一〇五七）作」とする。その理由について箋注では、王洙が嘉祐二年に亡くなっているため、嘉祐三年はありえないとして「詩云「是時春正中」、知作於二月。據居士集卷三「翰林侍讀侍講學士王公墓誌銘」、王洙（字原叔）卒於嘉祐二年九月、豈有三年聯句之事」と記述

する。また、周必大らが制作年を確定できなかった『居士外集』卷十九の「問劉原甫侍讀入閣儀帖」については、劉敞が翰林侍讀學士になった時期を『續資治通鑑長編』卷百九十二、嘉祐五年九月の記事で確認して、さらに劉敞の「劉公行狀」や潘永因『宋稗類鈔』の記事を考え合わせて作成年を嘉祐五年と特定している。このように、本書では周必大らの確定した作成年の訂正や、彼らが特定できなかった制作年を多くの資料を駆使して確定させている。こうした作成年の確定は、ともすれば牽強附會の感を抱かせることもあるが、洪本健氏の場合は、多くの證據資料に基づいた確定であり、しかも證據資料が見つからない場合は、無理に制作年を確定しようとはせずに「作年不詳」と記述することからも、洪氏の制作年確定の實證的態度が見て取れる。

ところで『居士外集』卷一の「答楊闢喜雨長句」詩について、本書の箋注では作成年を考察して次のように記述する。

此詩原未繫年、置天聖、明道詩間。慶曆三年、歐作送楊闢秀才詩云「吾奇曾生者、始得之太學。初謂獨軒然、百鳥而一鶚。既又得楊生、羣獸出鱗角。」可知「得楊生」在識曾鞏之後。歐識曾鞏在慶曆元年鞏入太學時、慶曆二年（一〇四二）楊闢來京應試、歐當於此時識之而作此詩。

「送楊闢秀才」詩に基づく、歐陽修と楊闢が知り合ったのは、歐陽修が曾鞏と知り合った後であることがわかり、歐陽修が曾鞏と知り合ったのは慶曆元年（一〇四一）なので、この詩はその翌年、慶曆二年の作であると洪本健氏は推定するのである。宋六家の繋がりを編年にまとめた『宋文六大家活動編年』の慶曆元年の項に「曾鞏入太學、與王寅亮定交、乃館于其家。上書歐陽修、并獻雜文時務策兩編。修見曾文而奇之」として、歐陽修と曾鞏の出會いが記述され、そこでは資料として「送楊闢秀才」詩や曾鞏の「上歐陽學士第一書」等を引用している。まさしくこれらの考察結果に基づいて、洪本健氏は本書の箋注の中で「答楊闢喜

雨長句」詩の制作年について記述したと考えられる。

このように『歐陽修詩文集校箋』は、洪本健氏の先行する歐陽修関連の著作——『醉翁的世界—歐陽修評傳』、『宋文六大家活動編年』、『歐陽修資料彙編』の成果を、その箋注、編年、集評に様々な形で取り入れ存分に生かしているのがわかる。本書は洪本健氏の長年の歐陽修研究の基盤の上に立つ著書と言うことができ、今後の歐陽修研究に缺かすことのできない基礎的書籍だと考えられるのである。

さて、劉子健氏によって一九六〇年代に本格的に開始されたと言える歐陽修の研究は、今世紀に入って益々進展し、歐陽修生誕千年である二〇〇七年八月には、歐陽修の故郷である江西省の吉安で「紀念歐陽修誕辰一千周年國際學術研討會」が舉行され、その成果が『歐陽修研究』（學林出版社、二〇〇八年）として出版された。該書には歐陽修に関する五十三編の論文が収録されている。一方、臺灣でも二〇〇七年九月に臺灣大學が主宰して「紀念歐陽修一千年誕辰國際學術研討會」が開催され、その成果として論文十四編が収録された『紀念歐陽修一千年誕辰國際學術研討會論

文集』（國立臺灣大學中文系、二〇〇八年）が刊行された。このように、これまでの歐陽修研究の成果が生誕千年を契機として、次々に發表され、まとめられたのである。また、今世紀に入って歐陽修全集が相次いで刊行されたのも、歐陽修研究が活況を呈している表れであろう。すなわち、二〇〇一年には李逸安點校『歐陽修全集』（全六冊、中華書局）、二〇〇七年には李之亮箋注『歐陽修集編年箋注』（全八冊、巴蜀書社）、そして二〇〇九年には本書が刊行されたのである。これらによって、歐陽修を研究する際の基礎的資料であるテキストがほぼ完備されたことになり、歐陽修研究の環境は以前より一段と整ったと言える。しかしながら、注意すべきは、李逸安點校『歐陽修全集』は校勘に優れているが底本の選擇に大きな問題があり、李之亮箋注『歐陽修集編年箋注』は全編を通して編纂が杜撰だということである^③。

従って、今後の歐陽修研究において、テキストとしては本書を使用すべきである。ただ、本書は『居士集』五十卷、『居士外集』二十五卷部分の作品を対象とするものであり、

『歐陽文忠公集』百五十三卷のうち、『居士集』、『居士外集』以外の残りの七十八巻については未收録である。そこでこれら七十八巻部分の作品については、天理本等の南宋本は簡単に入手できないので、作品の配列は比較的手しややすい四部叢刊本に基づき、校勘の優れている李逸安點校『歐陽修全集』を適宜参照するという態度が必要であろう。今後、本書と同じ方針で残りの七十八巻部分が刊行されたならば、その時こそ歐陽修の全集百五十三巻の盤石なテキストの完成だと言えるだろう。今後の展開を期待したい。

注

- ① 四部叢刊本は、封面裏に「上海涵芬樓景印元刊本」とあることから、これまで元刊本と考えられてきた。しかし、實はそれが明代に刊行されたものであることについては、森山秀二「元刊本『歐陽文忠公集』を巡って」（『經濟學季報』五十卷一號、二〇〇一年）を参照のこと。
- ② 拙稿「天理本『歐陽文忠公集』について」（『中國文學論集』第三十號、二〇〇一年）参照。
- ③ 李逸安點校『歐陽修全集』、李之亮箋注『歐陽修集編年箋注』の特色等については、拙稿「近年出版の三種の歐陽修全

集について」（『橄欖』第十七號、二〇一〇年）参照。

* 歐陽修は、歐陽脩とも表記されるが、論述の都合上、本稿では歐陽修という表記で統一した。

（上海古籍出版社、本文二〇二七頁、二〇〇九年八月版）